

かつての苦しかった日々のことを思い出して、再び日本があのような悲惨な事態を繰り返すことのないように祈りながら、まとめた次第である。

北朝鮮からの逃避行

福岡県 有馬 健二郎

一 生い立ち

私の育った清津府は、ソ連邦との国境から約百キロメートル南に位置し、満州と日本を結ぶ人物資の大動脈の要点として発展した街で、北部地区の清津には港湾施設と商業街が、南の羅南は咸鏡北道の道庁と第十九師団の司令部があり、街の大半は軍隊の施設で占められていた。

日本海に沿ったその間十六キロメートルは、道幅約二十メートルの舗装道路（清津街道）と、咸北線の鉄道によって結ばれており、その沿線には三菱製鋼、日本紡績、日本製鉄などの工場群と大手水産会社の漁港、水揚げ鮮魚の加工処理場、油脂タンクなどが延々と並び、発展途上の工業地帯を形成していた。

昭和十七（一九四二）年、国民学校入学までを

清津市街と港を望む高台で育った私は、府庁に勤めていた父の転職により、清津と羅南のほどにあつた日本製鉄の社宅に移った。通学は羅南国民学校までの七キロメートルの道程を会社の専用バス二台で往復したが、楽しみだったのは広い清羅街道を二台のバスが競争することであつた。今も記憶にある車両番号一四九九のこの車、運転手は朝鮮人で、朝夕の競争で勝つことが多く男子生徒の人気の的だつた。

羅南の街はいつも軍人であふれていた。将来、国に奉公することを第一義に躰られていた私にとつては、規律ある軍の行進、行動の折々に発せられる号令などを見聞きしては、軍国少年としての意識をいやが上にも高めたものだつた。

学校の裏側にはレンガ造りの師団司令部と軍人官舎が整然と並び、西側には石造りの連隊兵舎があつて、北側の丘の先には練兵場が広がつていた。歩兵、騎兵、戦車兵、砲兵の各隊が行進、突撃などを展開する記念日は、胸躍る思いで参観してい

た。

開戦からの連戦連勝にわいていたころは、一年生でも小国民としての自覚ある行動を求められていた。私たちが教師の鏡と慕つていた担任の岸川綾子先生は、規律と勇気を教育の基本とされてい、「泣くことは日本男児としてもつとも恥ずかしいことです」と言つておられたのが印象に残っている。

昭和十八年四月、私は社宅に隣接して新設された松原第一国民学校へ転校した。ラジオからは連日のように大本営発表の大戦果が流れ、ほとんどの在留邦人はその報道を疑うことはなかつた。ソ連軍に対しては、北の満州に精鋭関東軍が、府内には第十九師団がともに守りを固めていると信じていた。

翌十九年、三年生になつたころから戦果の報道とは裏腹に日々の暮らしや学校教育にも変化が現れてきた。朝礼での校長訓話でいつも言われた「日本は必ず勝つ」の言葉に「神風は必ず吹く」が付

け加えられるようになった。

同級生の父親たちには召集令状が、兄の間には兵を志願する者が増えていった。私たちも足にゲートルという兵隊姿で地域ごとに隊列を組んで登校するようになり、土曜日は授業の代わりにグランドで分列行進をやったり、上級生はモールス信号、私たちは手旗信号の訓練に明け暮れるようになった。

国境に近く軍都を控えた土地柄だけに、ひとたび大事が起これば、日ごろの訓練の成果を發揮するように言われていた。授業前に行われた教育勅語・軍人勅諭の暗唱や軍歌演習など、軍国少年育成の強化が図られた。

四年生の春、製鉄所構内のワークス選別作業に動員されたが、このころにはすっかり戦士になりきったつもりのははすっかき戦士になりきった。やがて親友の恩田君の父君にも召集令状がきた。出征前夜、一家で招かれた別れの宴で、「家族を頼みます」と幾度となく言われたことが

深く印象に残っていたが、後に恩田君一家六人は咸鏡南道の富坪収容所で全員亡くなった。

二 ソ連軍上陸

昭和二十年八月十三日正午前、突如地面を揺るがすような轟音が響き、窓ガラスが激しく振動し続けた。砲撃であった。三日前の十日には、数十機のソ連空軍によって清津市街と工業地帯が昼夜にわたって爆撃を受けた。夜間の銃撃戦は花火大会を見るようで、照明弾は閃光、機関銃は線香花火、サーチライトの青い光は大空へと続く道、高射砲の真つ赤に焼けて飛んでいく砲弾は火の筒のように、私は緊張することもなく、まるで人ごとのように眺めていたが、砲撃による轟音は間断なく続き、一キロメートルほど先の製鉄所の上空は黒煙で覆われていた。そのとき、父純雄（四十五歳）は出勤中、母久子（三十五歳）、兄純一郎（十一歳）、弟征士郎（二歳）は外出しており、私（九歳）は妹礼子（七歳）と留守番をしていた。砲撃は激しさを増すばかりで、家の前の道路には、リ

ユックサックを背にして慌ただしく社宅から避難していく家族連れが見えた。父母の帰りを待っていた私と妹は、こらえきれずに玄関先の防空壕へ潜り込んだ。やがて、人の足音も途絶え静かになった社宅街には、砲声だけが響いていた。心細くなって外の様子をうかがうと、日本兵の一隊が日鉄病院の前から製鉄所の方に向かって見えた。完全武装で剣を着けた銃を持ち、偽装した砲を引いている兵の顔は、この世のものとも思えなかった。

恐怖のあまり妹と再び自宅に戻ったが、やがて玄関を激しくたたいた音がした。扉を開けると、ここには全身血まみれの兵を支えた兵隊が立っていた。「坊や水を！ 水を早く」との声にコップ一杯の水を渡したが、負傷兵は既に飲む力はなかった。「有り難う」と礼を言った兵隊に、引きずられるように去っていった。子供心にもそれが末期の水であろうと思った。

三 自宅をあとに

やがて、弟を背にした母と兄が帰宅した。母の用意した当座の荷物を、それぞれのリュックサックに詰め終えたころ、父が息を弾ませながら帰ってきた。日ごろ無口な父の「ソ連軍が上陸したぞ」

「清津は市街戦だ」という大声に、事態の重大さを知って直ちに自宅をあとにした。通りには人影もなく、社宅の角を回って百メートル先の清津街道に出ると、北方からきた避難民が道いっぱいにあふれ、重い足を引きずるようにして羅南を目指していた。羅津から四日かけて逃げてきたという婦人は、髪は乱れ衣服は汗まみれで、乳児を胸に抱き幼児を背負った上に四歳ぐらいの女の子の手を引き、一方の手で小さな風呂敷包みを提げ、倒れる一歩手前のようにであった。集団からは遅れるばかりであったが、だれも手助けできるような状況ではなかった。夫が召集されて、男手のない家族の逃避行は悲惨なものであったが、このような状況は至る所で見られ、何とか祖国に帰りたいたい

必死で願いながら北朝鮮の山野で散っていった母子は多かった。

また、六キロメートルほど先の羅北橋のたもとでは、馬上の軍人が「在郷軍人は部隊へ行つて銃を取れ」と叫んでいて、中学生の中には勇んで応じた者もいた。根こそぎ動員の裏には、瀬戸際で敵を撃退するという軍の強い意志と兵力不足があったと思われた。当時は知る由もなかったが、精鋭といわれた関東軍も第十九師団の主力も、既に南方の戦場に移動していた。

羅南駅からの南下は不可能という情報があつて、私たちは会社の方針通り、羅北川に沿う北西二十五キロメートル先の富潤洞へと向かった。しばらくして、空模様が怪しいなと思つたら雨となつた。この地方は夏でもかなり冷え込むので、これ以上進むのは困難と判断して、朝鮮人の小屋に一泊した。翌日は晴天で、製鉄所方向の砲声を聞きながら先を急いだ。日本の不敗を信じていた私たち家族は、二度と自宅へ戻ることのない十カ月に及ぶ

逃避行になろうとは、夢にも思わなかった。

四 富潤洞から延社へ

午後富潤洞に着くと、会社の人が多数集まっていたが、皆一週間ほどの避難と楽観して、さほどの緊張感はなかった。工事現場の飯場らしい所で三、四泊していたが、戦況が厳しいという情報があつて、朝満国境を流れる豆満江に面した茂山に向かうことになった。これから先茂山までは、標高千五百メートル級の山々が連なる咸鏡山脈の山越えとなった。

出発してほどなく、待避した岩陰からソ連機の猛爆を受けている富潤洞方面をのぞくと、宿泊していた飯場付近からも黒煙が立ち昇っていた。進むにつれて道は険しくなり、森林地帯へと続いた。初めはまとまっていた集団も、速い者と遅い者へと散り始めた。そして病人を抱えたり、妊婦や母子だけの家族は路肩に座り込んで取り残されていた。車一台がやっと通れるほどの坂道を、弾薬、食糧などの物資を牛車に満載した兵隊たちの列が、

避難民を追い越して登って行く。避難民の中から、「兵隊さん、頑張って下さい」「戦況はどんな様子ですか」と声が飛んだ。「大丈夫です」「しばらくの我慢です」「硫黄島も沖繩も奪還しました」という返事を励みとして進んで行くと、食糧を積んだ荷車が一台路端に置いてあった。追い越していた兵隊が、避難民のために残していつてくれたものであった。私たちはその温情に感謝しながら、めいめい米、乾パン、金平糖などをリュックサックに詰め込んだ。

山道はますます険しくなり、辺りは昼間でもほとんど日の差さない原生林となった。私たち親子六人は、二枚しかない毛布をかぶってお互い暖め合いながら、夜の冷え込みを防ぎ、谷川の水で炊飯をした。

三日ほど歩いて、道は二手に分かれていた。私たちが選んだ道は、進むに従って行く手を阻むかのように険しくなり、その上直径一メートルもある倒木が何本も道をふさいでいた。夜になるとオ

オカミの遠吠えが聞こえるので、大人たちは枯れ枝を集めて燃やしながらか寝番を勤めた。砲声は全く聞こえなくなり、道ともいえない道を行くの不安を覚えながら、さらに山深く分け入ったが、その歩みは遅くなるばかりであった。

五 延社で敗戦を知る

やがて道は下りになり、高原に出た。白茂線の中ほどにある延社という田舎町だったが、各地からの避難民が大勢いた。

当時延社は停電になっていたため、外部からの情報は伝ってこなかったが、日本が負けたという噂は流れていた。信じられないままに、河原に野宿した。翌二十三日は、忘れもしない私たちが「敗戦」を知った日で、十五日の終戦から八日遅れのことだった。

大人たちの動揺は大きく、すぐに南下する家族も多かった。そんな中、父は私たち家族を雑踏の中から連れ出し、近くの河原に座らせて「もしもソ連軍から屈辱的な仕打ちを受けるようなことが

あれば、お前たちを殺して自刃する」と、我が家に伝わる脇差しを手にして語った。恐怖感は覚えなかったが、神州不敗を信じていた私にとって、敗戦は相当な衝撃だった。

六 白岩へ

その日の夜半、ソ連軍が戦車を先頭に進駐してきたという知らせを受けて、急に出立することになった。狭く険しい峠道をいくつも超えて、ようやく夕方楡坪という集落に着いた。ここから貨車が出るのだが、駅の周辺は疲れ切った難民があふれていた。遅れて着いた私たち家族は乗車の望みも断たれ、途方に暮れていたときに、父と同じ会社に勤めていた金山さんという朝鮮人に出会い、「必ず乗れるようにします」と励まされた。やがて入ってきた無蓋車に殺到する人々の怒号と悲鳴の中、金山さんの先導で最後尾の貨車に飛び乗ることができた。昨日までの規律ある日本人とは全く様変わりした姿は、醜い限りであった。「頑張って日本へ帰って下さい」「またお会いしまし

よう」と言いながら、手を振って見送ってくれた金山さん。彼ら親日家もその友情が仇となって、同じ動乱の渦に巻き込まれていったのを省みて、今も胸が痛む。

やっと乗り込んだ貨車は、燃料不足や水の補給で途中たびたび停車したが、翌朝高い山間の町白岩に着き、私たちは駅の横の倉庫らしい所へ入った。駅前の広場には、新しい朝鮮の国旗と赤旗が立ち並び、朝鮮人の態度も高圧的で敗戦の実感を身にしみて味わった。

倉庫からは駅のホームは見えなかったが、人々が群れをなしていて、やがて列車の到着とともに「マンセイ」「ウラー」という喚声がわきあがる中、ソ連軍の第一陣が到着した。しばらくして、赤ら顔の体の大きなソ連兵が朝鮮人の通訳を伴ってきて、「荷物を持って小屋の前に出よ」と命じた。父を見たソ連兵が、首から提げた自動小銃を胸に突き当てながら「お前は軍人だろう」と迫ったが、父は泰然として無言のままであった。柔道で鍛え

たがっしりとした大きな体格と、軍服調の上着で疑われたらしい。母がリュックサックの中から「船舶運営会」と書いた腕章を取り出し、父が民間人であることを必死で訴えた。母が差し出した懐中時計を不満げに受け取って立ち去って行く兵士に、私たちは思わず顔を見合わせ、ホッと安堵の吐息をついた。家族の不安をよそに「ソ連兵に頭を下げる必要はない」と言い放って、金山さんからもらったたばこに火をつけた父を説き伏せて、母は上着だけは着替えさせたが、日本人としての誇りを捨てきれない父に一抹の不安を覚えた。

七 白岩、城津、咸興

白岩に一泊後、山坂を越え、野宿を続け日本海沿岸の工業都市である城津を目指した。九月の初め、城津の町が一望できる峠に差し掛かったころ、運動靴の底が抜け、足にできたまめで歩けなくなつた。ちょうどその峠の頂に一軒の農家があつて、その軒先を借りて休憩したが、私の足を見た老婆はたどたどしい日本語で「ちよっと待ちなさい」

と言つて、草履を作り始めた。長い時間にも思われたが、やがてできあがった草履を私の足に履かせて、ひもを結んでくれた。母がなにがしかのお礼を払ったが、老婆の親切心は心にしみて嬉しかった。

城津に近づくのと町の治安が悪いとの噂で、市の背後にある山を越えて幹道に出ると、捕虜になつた日本兵の集団がソ連兵の警備の中、私たちとは反対の北に向かって歩くのに出会つた。すれ違ひざまに「申し訳ありません」「元気で帰国して下さい」と励ましてくれる兵もいたが、うなだれている兵の姿はまさに敗戦そのものであつた。南下するソ連軍の部隊にもたびたび出会つたが、前方偵察のために必ずジープか騎馬に乗った兵が先行していた。ある日、二人の騎兵に気付いた私たち十人は、急いで道沿いの松林に駆け込んだ。岩陰に息を凝らして隠れていたが、赤ん坊が突然泣き出したのに対して、「泣かすな」「見つかるぞ」と、男たちの低い声がした。泣き声はやんで静かにな

った。ソ連軍の部隊が去った後、口をふさがれて死んでしまった赤ん坊を抱きしめた母親のすすり泣きが続いていた。集団の中でも婦女子の立場は弱く、犠牲になった事例は枚挙にいとまがなかった。

ソ連が終戦直前満州に投入した兵士は、犯罪を犯しシベリアの刑務所に収容されていた者が多く、暴行、略奪などは日常茶飯事であった。私たち避難民は彼らから身を隠すしかなかったから、往來の激しい幹道をさけて山道に入り、野宿を続けながら咸鏡南道の主要都市咸興を目指して南下した。月日が経つにつれて、日本人に対する風当たりは悪くなる一方で、食糧調達も野宿も困難を極めた。水をもらいに行った集落では、「昨日通りかかった日本人が井戸に毒を入れた」などと言いがかりをつけられたり、「日本人にやる食べ物などない」とか、法外な値段をふっかけられたりした。飢えには勝てず、畑から失敬した野菜などでのいだ。

集落の外れで野宿をしていると、自警団と称する青年たちが木刀などを持って押しかけ、「三十二年間、自分たちの生き血を吸ってきたお前たちには恨みがある。早く立ち去れ」と脅かされたり、金品を強奪する者さえいた。中には例外もあって、我が子が日本にいるオモニは、「これは日本人への恩返し」と言って食事を振る舞ってくれ、その温情は今も忘れない。

戦後創設された北朝鮮の保安隊による検問は実に厳しく、ことに元警察、警務、憲兵関係者に対する摘発は執念深かった。避難民に紛れて一般人として行動していた彼らが、逮捕されて拷問を受け、中には責め殺されたというところもしばしば聞いた。

また日本の国旗に対する憎しみもひどく、腰に隠し巻いていた日の丸を見つられてはぎ取られ、旗は踏みつけられた上に、数人がかりで見ると耐えないほどの暴行を受けた人もいた。日の丸は私たちにとって日本の象徴であり、この光景は屈辱

的なものであったが、避難の途中で国の主権も届かない私たちには、抵抗する力もなかった。

昨日は私たち家族だけ、今日はどこからきたかも知らない集団と一緒にただ黙々と南下したが、連日の野宿と食べ物^の欠乏による栄養失調から、体力が低下して落伍する人が増えていった。

八 威興

十月の中旬、やっとたどり着いた威興には、駐留ソ連軍とも朝鮮人とも融和している多くの日本人がいた。北からの難民から見れば、別世界の暮らしぶりであった。

既に先着していた難民は、公共の建物、会社関係の施設や知人の住宅に収容されていて、賃仕事にありついている人も多かった。

私たち家族は、道庁横の坂の途中にあった請負業森山氏宅の土間を割り当てられた。預金を下ろす間もない、着の身着のままの逃避行では、その日の暮らしにもこと欠いた。父は、この地で出会った同郷の中渡瀬氏の紹介で、朝鮮人宅の薪割り

をすることになり、母と私たち兄弟は、ガラス張りの箱に入れた餅団子を首から下げて市場で売ることになった。私たちは駅弁売りそのままだと思った。この収入で何とか飢えはしのげた。

十一月になると、朝夕の冷え込みは一段と厳しさを増して、虱^{しらみ}が媒介する発疹チフスにかかったり、栄養失調になったりして、難民の死者は増えていった。

九 興南の収容所と弟の死

十一月中旬ごろ、興南への移動が決まった。土間などで暮らしていた貧しい者が対象になったと噂されていたが、不衛生な環境によって発疹チフスが蔓延するのを防ぐ意味があったようだ。移り住んだ興南の収容所は、暁星寮という日本窒素の独身寮だったというレンガ造りの二階建てで、六畳一間の部屋がいくつもあった。建物の荒廃はひどく、窓ガラスは破れ、畳もなかった。床に筵^{むしろ}を敷き、夜は布団代わりの貴重な二枚の毛布とわらをかぶって寝たが、零下二十度を越す冬場は満足

な睡眠が取れるはずもなく、各自布で包んだ焼石を抱いて、寒さと空腹に耐えながら寝た。その上、威興と違って日銭を稼げる仕事もなく、飢えと闘う日々はつらかった。母は白岩での体験から、シベリア送りの危険のある父の外出を認めず、日々の食糧の調達は、母と兄と私の三人の肩に掛かった。いわゆる乞食であり、三人それぞれ別行動だった。私の初めての物乞い先は、朝鮮人の長屋社宅だった。当時は彼らも食糧難には変わりはないが、家族の分を削ってまでも、私たち難民に施してくれる人もいた。近所の人に親日家と思われるのをはばかって「日本人にやる飯なんかない」と表に向かって叫びながら、笑みも優しく差し出した小鍋に、少量ではあったがご飯を入れてくれて「早う帰らんか！」とまたも叫んで、ガタンと激しく扉を閉め切ったオモニの温情には今も感謝している。

そのころ、女性を求めてソ連兵が来るようになったので、母と妹は顔にすずを塗っていた。娘を

かばった父親が拳銃で撃たれたり、指をナイフで切断された事件も近所では起こっていた。悲惨な事件はほかにもあった。元警察官が手足を体ごとロープでぐるぐる巻きにされ、土手の上を走る鉄道線路を枕にして寝かされ、新九龍駅から走ってきた列車に轢殺された光景は、今でも脳裏に生々しい。

寮の前には、鉄条網に囲まれた日本兵捕虜用の病院があつて、警備はソ連兵、医師と看護婦は日本兵だった。道を挟んだ十字路の角に立っていた室素の寮は、ソ連軍の兵舎になつていて、頻繁に兵士の移動が行なわれていた。家族連れの将校は、五百メートルほど先の鉄道線路の土手を越えた所に建っている同じ室素の幹部社宅に住み、独身の将校は隣接する職員寮に入居していた。

十二月中旬、母が発疹チフスにかかったが、医者はおろか薬さえなく、一週間ほどの間意識不明のままであった。やっと回復の兆しが見えてきた二十八日の朝、そばに寝かせていた、弟征士郎に

触れた際の異常な冷たさに、その死を知った母の悲しみは深かった。栄養失調と寒さによる衰弱死であった。北朝鮮の冬は山肌を深くまで凍らせてしまうほどで、墓を掘るのは不可能なので、秋の初めに日本人が動員され、興南の市街から数キロメートル離れた三角山に幾列もの壕が掘られるとことだった。死亡者が相次いだ、リヤカーを引いての遺体運搬は、体力の不足と天候に左右されるため、一週間に一回程度だった。その間、胴体にもを巻いただけの遺体は、一階の通路に積み重ねられていたが、放置されたままの弟征士郎のそばを通るたびに、その頭と足をなでていた私には、慣れのせいと別に悲しいなどという感情がわくこともなかった。

寮の中庭にあった長方形に掘られた便所は、何枚もの足場板が渡され、周囲にむしるを吊り下げただけの簡単なものだったし、栄養失調の下痢便で、今でもふっと鼻先をかすめるように感じるほど異様な臭いであふれていたが、極限状態の中

は、男女問わずだれ一人として嫌だとか恥ずかしいなどと思うものはいなかった。

そのうち私も発疹チフスにかかったが、母ほど悪くならず、まもなく回復した。母と私が病床にあった間、兄は糧を得るため孤軍奮闘の働きで、将校家族宿舍とそれに隣接する独身女性将校の寮を開拓していた。この地域の周囲と辻々にはパトロールのソ連兵がいて、発砲される恐れがあったから立ち入ることは難しかったが、いつも同じコースを同じ時刻に回っていたから、パトロールの兵が通った直後なら侵入できると、兄は要領をつかんでいた。体調の戻った私を連れて日参した将校宿舍の前には、家ごとにコンクリートのゴミ箱があつて、その中には口にできるものも捨てられていた。といつても厚めにむいた馬鈴薯パレイシヨやリンゴの皮や、日本製の缶詰の底にわずかに残っているくずなどで、底の部分に汚れが層をなして水分も通さない風呂敷に、残り汁とも入れて持ち帰った。独身女性将校の寮は三階建てのレンガ造りで、上

の階に住んでいた美人の将校が兄をひいきにくれていた。下から「ヘイヘイ」と叫ぶと窓を開け、「ジュンジュン」と覚えた兄の名を呼んで、兄が広げた風呂敷に黒パンなどを入れてくれた。兄はまた将校食堂の調理室のコック兵にもかわいがつてもらっていて、小さな開き窓をたたいて合図を送ると、兄を確認してから温かい揚げ物などをくれた。兄のお供をしたおかげで、私も女性将校とコックの所に一人でも物乞いに行けるようになった。また、将校宿舎を戸別に訪問する手口もあつた。パトロール兵の動きに注意を払いながら勝手口の戸をたたき、顔を出した婦人に「マダム、パパ、ママ、ニエット、クレーブダワイ」と、聞き覚えた単語を並べながら哀れな孤児を装い、黒パンなどの施しを求めた。大抵は、顔色の悪い垢じみた私を見ただけで扉を閉め切られたものだったが、一人だけ温かく迎え入れてくれた親切な婦人がいた。招き入れた勝手口の中で、濡らしたタオルで私の顔と手をふいて「死んだら駄目よ」と

言ってくれた。当時は戦勝国のソ連軍も物資は豊かではなく、彼らにとつても貴重品だった、日本軍からの戦利物資の缶詰や砂糖、ほかに馬鈴薯、黒パンなども少しだけだったがくれて、「巡視兵には気を付けてね、死んだら駄目よ」を繰り返しながら、優しく送り出してくれた。危険を伴う区域への侵入だったので頻繁には行けなかったが、あのマダムの優しさは忘れられない。

一月になると冷え込みは一段と厳しくなったが、暖をとるために燃えるものは燃やしてしまい、ガラスのない窓枠や廊下の板も必要最小限を残すだけとなってしまった。燃やす物がなくなりかけたとき、斜め前にあるソ連軍の兵舎が部隊の移動で空き家になった。辻に面した廊下の扉が開いているのに気付いた兄と私は、夕暮れ時をねらって廊下の板をはぎ取ることにした。そのための道具として、こぶし大の石と先の平らな金具を用意し、陸軍病院の巡視兵に注意を払いながら板のはぎ取りに掛かった。金具を板と下部の木材との間に押

し当てて、その頭を石で叩いてできた隙間に指を入れ、腰を落として二人で一氣に板を持ち上げた。その瞬間のバリバリという大きな物音に気が付いたソ連兵が、廊下の反対側から走ってきて、マンドリン銃の乱射を浴びてしまった。幸いにも無事逃げ帰ることができたが、二人とも青息吐息だった。

陸軍病院を囲む鉄条網の裏に、山積みになされていた石炭があった。ある日、午後九時を過ぎても帰ってこない兄を心配していたら、突然銃声が響いた。ほどなくして、息を弾ませながら帰ってきた兄の話によれば、石炭を袋に詰め込んだところへパトロールの兵隊がやってきた。逃げ出そうにも、大きな袋を抱えて動きがとれず、やつと隙を見て逃げ出したが、気付かれて連射されたのと同時にであった。早速獲物の石炭を竈で燃やしたが、突然爆発が起きた。ソ連兵に気付かれはしなかったが、壁から天井にかけて無数の弾痕が目についた。調べてみると、石炭の中に小銃弾が混ざって

いた。だれもけがをしなかったのが、今もって不思議でならない。思えば子供ながら家族を守るために必死で、無謀と思われることでもあえてやらなければならぬ日々であった。

しかし愉快なこともあった。日本兵捕虜病院の警備兵一人が、二人の日本兵捕虜にリヤカーを引かせて、九童里社宅前の浜辺に差しかかったときのことであった。朝鮮人の保安隊員が多く見物人が見守る中で、沖に浮かぶ鴨を撃ったが当たらず、見ていた人々の失笑を買った。見かねて代わったソ連兵がマンドリン銃を連射したが、やはり駄目。いらだったソ連兵は、保安隊員が持っていた三八式小銃を取り上げ、日本兵捕虜に渡して撃つてみると言った。日本兵は見事一発で仕留めた。見ていた私たち日本の少年は、敗戦以来久しぶりに小踊りするような喜びを味わった。

死者の数は一向に減らず、ソ連軍もその惨状を見かねたのか、米の配給、寮の風呂場を使つての入浴、その間に煮沸車で衣服の虱を退治するなど

の手を打った。八月十三日家を離れて以来、初めての入浴は慌ただしいものであったが、嬉しい限りだった。

四月下旬、咸興の南にある永興に貨車で移動することになり、三角山に眠る弟に思いを馳せながら興南に別れを告げた。この五カ月間に、寮の死者は四百人中百五十人にも達していたそうである。

十 永興

私たちが二週間ほど滞在した収容所は養蚕場の跡で、床全面がコンクリート張りの広間であった。少量ながら米の配給もあり乞食することもなく、三十八度線突破までの束の間の休息ともいえる久しぶりの平穏な日々であった。ある日、顔半分が陥没したソ連海軍将校が収容所を訪ねてきた。父が聞くと「ドイツに対する恨みはあっても日本人は尊敬している。今度の戦争ではソ連が勝ったものの、先の戦争では日本が勝利している。元気を出して無事帰国を果たすように」とのこと、日本難民を励ますためのソ連軍人の個人的な慰問は

思いがけない出来事だった。

十一 南下

再び三十八度線を目指して徒歩で南下することになった。配給された米を煎って袋に小分けしたものを、それぞれのリュックサックに詰めて出発した。道中は、相変わらず保安隊や自警団による臨検が続いたが、興南以北ほどの恐怖感はなく、気候も良くなって歩数も増えていった。

十二 三十八度線突破、京城（ソウル）へ

野宿を続けながら高原から元山を過ぎると、道は朝鮮半島の中央部へ向かい、遠く鉄原の町を左に見て山間部をたどったが、いよいよ三十八度線が間近と知って私たち数十人の集団に緊張が走った。しばらく進むと保安隊の分駐所があり、ここが最後の関所と判断した大人たちはすべての金品を提供することにしたが、私たち家族には提供するものは何もなかった。代表が集めた金品を差し出して通過の許可を願い出たが、意外にも親切に越境地点までの安全なルートを教えてくれた。皆

無言のまま細い農道をしばらく進むと、幅十メートルほどの流れの緩やかな川に突き当たった。これこそ、保安隊が教えてくれた米ソを分ける三八度線の境界であった。深さは膝丈ぐらいで、皆先を争って踏み込んだところ、自動小銃を手にしたソ連兵が松林の中から現れ、引き返すよう合図した。驚きのあまり皆立ちすくんでしまつて、だれ一人動けなかった。そのとき、張りつめた空気を破るかのようにカラフルな紙風船らしいものが突然流れだし、二人のソ連兵は小銃を川岸に放置したまま、そのあとを追い掛け始めた。その隙を ついて、皆一斉に必死の思いで対岸へと渡つた。私たち兄弟が先陣を切つて林を駆け抜けると、黄土の平原が広がり、その彼方に長く続く土手が見えた。平原の中ほどまで走つたとき、その土手の上に次から次へと鉄兜が現れ、またもソ連兵の出現かと思つた私たちは、方向を東へ変えて走り続けたが、やがて疲れ果て黄土の上に座り込んでしまつた。もう駄目だと思つたとき一台のジープが

近づいてきて、私たちの前で停車した。「皆さんご苦勞様でした。ここは米軍の第一線基地です。ご安心下さい」と言いながら降り立った兵士の流暢な日本語に、婦女子はこらえきれずに声を上げて泣き、男たちは感極まつて言葉もなかつた。その日系二世通訳の先導で、土手の先にあるカマボコ兵舎に着き、DDTを頭からかけられて消毒された後、婦女子はチョコレートを、成人男性はたばこをもらった。

しばらく休んで後、和やかに朝鮮人が行き交う道をたどつて小さな街に着き、バスで京城へ向かつた。京都の大学に留学して、帰国後間もないという青年と乗り合わせ、「朝鮮と日本は仲良くしなければいけない。道中の嫌な出来事は水に流して下さい」と私を膝に乗せて語つたことも、今は懐かしい思い出となつた。京城に着くと再度DDTの消毒を受け、おにぎりをもつた後、龍山駅から列車で釜山へ向かつた。

十三 帰国（釜山―仙崎）そして帰郷

釜山で二、三泊していたが、乗船命令があつて港へ行くと、船尾に日章旗を揚げた。「朝博丸」という汽船が接岸していた。敗戦以来久しぶりに目にした「日の丸」に、祖国日本を実感し思わず高揚してしまった。六月上旬、やっと山口県の仙崎港に入ったが、船内に伝染病が発生したため、十日間ほど停泊した後上陸、父の故郷鹿児島へ向かった。

帰ってみると、不在地主だった父の実家は農地改革のために田畑は皆無に等しく、屋敷には父の記憶にもない家屋が建っていた。やむなく、その一部屋を仮の住居として生活を始めた。父は、役場に就職できたものの病に倒れ、苦しい生活から何事も意のままにならず夢をあきらめ、あえて地元の工業高校に進学、卒業後製鉄会社に就職、定年後の五年間、関連会社に勤めた。

今に至るまで胸に納めたまま、引揚げ途中の思い出を語ることはなかったが、道中の様々な出来

事は鮮明に記憶に残り、年老いるごとに日々新しい。

親に頼らず生きるための戦いであった避難行は、人生の難事にあつては大きな支えになった。

思えば国策に流されて、何も分らないままに他国の土を踏みに行ることになつてしまつたが、この体験を貴重な糧として反戦平和の心を持ち続け、日朝間の善隣友好の到来が一日も早いことを願つてやまない。

避難の径路

